

感覚間協応に基づく表現活動についての一考察

－絵本リトミックの提案－

大 浦 知 加*

A Study on Expression Activities based on Cross-modal Correspondences －Proposal for Eurhythmics of Picture Book－

Tomoka Oura

【キーワード】 感覚間協応, 表現, リトミック, 絵本, 音楽
Cross-modal Correspondences, Expression, Eurhythmics
Picture Book, Music

1. はじめに

保育内容「表現」とは、保育所保育指針・幼稚園教育要領・幼保連携型認定こども園教育・保育要領（以下、幼稚園教育要領等）（2017）で、「健康」「人間関係」「環境」「言葉」「表現」の5つに分類されている保育内容の領域の1つである。乳幼児の「健やかにのびのびと育つ」「身近な人と気持ちを通じ合う」「身近なものに関わり感性が育つ」という、3つの視点で示された力や態度が育っていくと、この5領域に重なっていく。このような5領域に設定されたのは1989年に「幼稚園教育要領」が改訂された時である。それまでは、「健康、社会、自然、言語、絵画制作、音楽リズム」のように、単独で「絵画制作」と「音楽リズム」があり、6領域に設定されていた。しかし、現在の「表現」に望まれるものは、戦後すぐの頃のように、枠にはまった「おゆうぎ」でもなく、単に「絵画制作」と「音楽リズム」が合体したものでもない。更に、上から下への「先生の真似をなさい」という支配や命令でもない。幼稚園教育要領等で「表現」は、子どもたち一人一人が「感じたことや考えたことを自分なりに表現することを通して、豊かな感性や表現する力を養い、創造性を豊かにする。」とされている。それは、子どもたち一人一人の内面にある感情や思い、目に見えないものや形のないものを、外部に形象化していくための活動であると考えられる（岡本ら 2020：8-9）。そのためには、保育者らにはそれらを引き出し、援助していく感性が求められているであろう。

岡本ら（2020：94-95）は、子どもたちの感性と表現に寄り添う保育者として、以下の4つのことが大切であると主張する。1つ目は、子どもが今、何に気づいて、何に興味を持ったのか、という「子どもの内面を読みとる」ことである。2つ目は、どうすれば子どもが主体的に関わって意欲的に表現することができるか、という観点で捉え、「表現意欲を引き出す工夫をする」ことである。3つ目は、子

所属および連絡先

* 大阪千代田短期大学

どもたちが何に心を動かし、何を楽しいと感じ、どのように表現しようとしているのかという「表現のプロセスに目を向ける」ことである。これらのことは、保育者自身の感性が豊かであるからこそ可能なことであるため、4つ目は「保育者自身の感性を豊かにする」ことである。今回、改訂された幼稚園教育要領等に「風の音や雨の音、身近にある草や花の形や色など自然の中にある音、形、色などに気付くようにすること。」と追加された文言のように、子どもたちの感性を豊かに育むためには、保育者自身が、そういったことを体験し、気付くようになる感性が必要となるであろう。

2. 保育者に求められるもの

保育者の感性を豊かに育もうとする試みは、「オペレッタ」や「音楽劇」を通して、保育者養成校でも盛んに行われている。筆者の、複数の表現領域を結び付ける「音楽表現」(大浦 2019) や、MI 理論に基づく「創作音楽劇」(大浦 2021) の中でも、他者の気持ちを想像したり、音楽を通し言葉で尽くせないところまで共有したりといった、感性が涵養される可能性が示されている。しかしそれは、特別な1日に向かう表現活動だけではなく、日常の生活の中で日々行われる、表現活動のプロセスが重要であろう。そして、保育者も、表現活動のプロセスに主体的に関わり、意欲的に表現する楽しい体験が必要であると考えられる。

高橋(2015)は、表現領域間の境界が不明瞭で未分化な子どもの表現活動を、認知心理学の「感覚間協応」という言葉で表し、色、音、香り等の異なる領域を結び付ける知覚現象と言い換えることができる、と説明している。そして、「音楽・造形・身体・言語」領域を結び付ける活動を、「感覚間協応」に基づく表現として、保育実践に導入する妥当性や理論的根拠について明らかにし(表1参照)、感覚間協応に基づく表現活動を、保育実践に取り入れる重要性を指摘している。

表1 感覚間協応とは(高橋 2015)

①「感覚間協応は子どもに広く当てはまる一般化の性質をもつ」
②「感覚間協応は11歳頃に減退するが、音楽家や画家などは大人になっても持ち続けている集団的特性がある」
③「表現という芸術活動と感覚間協応の間に強い親和性が見られる」
④「豊かな感性や想像力を育む上で感覚間協応が重要な役割を果たす」
⑤「感覚間協応に基づく子どもの表現活動が、『幼稚園教育要領及び保育所保育指針』の内容に適合する」

(出典) 筆者作成

これらのことから、日々の生活の中に取り入れることができる、感覚間協応に基づく表現活動プログラムを開発することが、「子どもたちが、感じたことや考えたことを自分なりに表現することを通して、豊かな感性や表現する力を養い、創造性を豊かにする」ことに繋がり、更には、そのプログラムを学生や保育者が体験することで「子どもたちの感性と表現に寄り添う感性を涵養する」ことにも繋がる、と仮説を立て、研究することとした。

まず、事前調査として、保育・幼児教育現場で日常的に行われている表現活動と、保育者が感じる、最近の子どもたちの表現方法の変化や、気になっていることについて調査する。そこから分析と考察を通し、表現活動プログラムの開発に繋げることを目的とする。

3. 方 法

(1) 研究の目的

「子どもたちが、感じたことや考えたことを自分なりに表現することを通して、豊かな感性や表現する力を養い、創造性を豊かにする」という観点で考えられた「日常の生活の中で行うことができる、感覚間協応に基づく表現活動プログラム」の開発に繋げることを目的とする。

(2) 研究の方法

2020年11月15日・22日・28日の3日間、勤務校での教員免許状更新講習「音楽表現」を受講された保育士・幼稚園教諭76名の方々に、無記名での自由記述アンケート調査を依頼。(質問は以下の2点) その結果から検証、考察することで目的に繋げる。

(1) 日常で行っている表現活動について

(2) 最近の子どもたちの表現方法の変化や、気になっていることについて

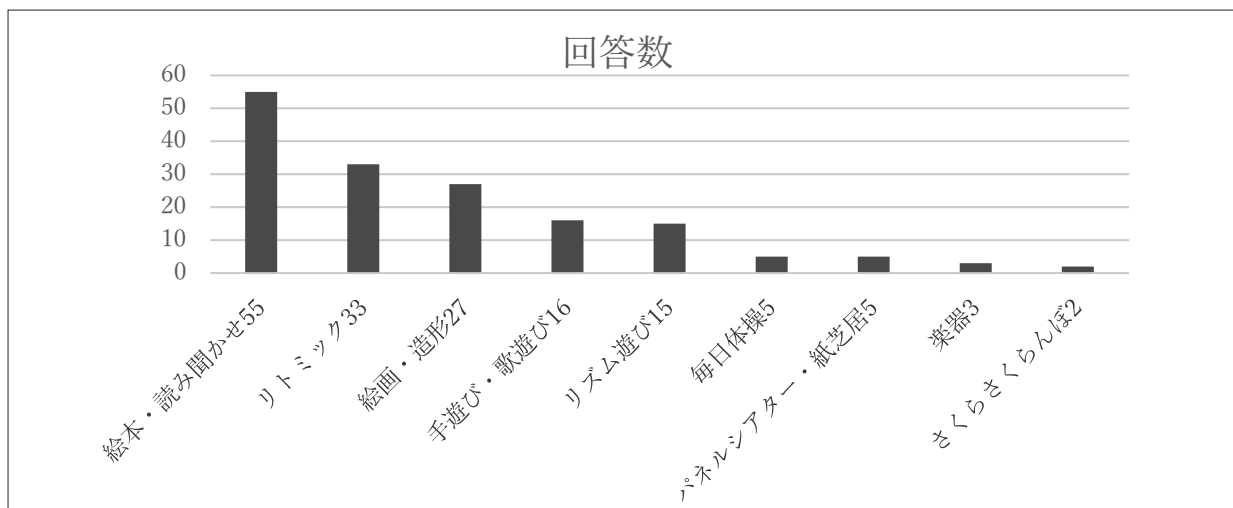
(3) 倫理的配慮

自由記述のアンケート調査について、受講された方々には、調査の趣旨、研究のための処理・集計の目的以外では利用しないこと、無記名で提出いただき、分析結果は個人が特定されないことがないように配慮することを説明し、承諾を得たうえで調査をした。

4. 結 果

(1) 日常で行っている表現活動について

表2 「日常で行っている表現活動について」

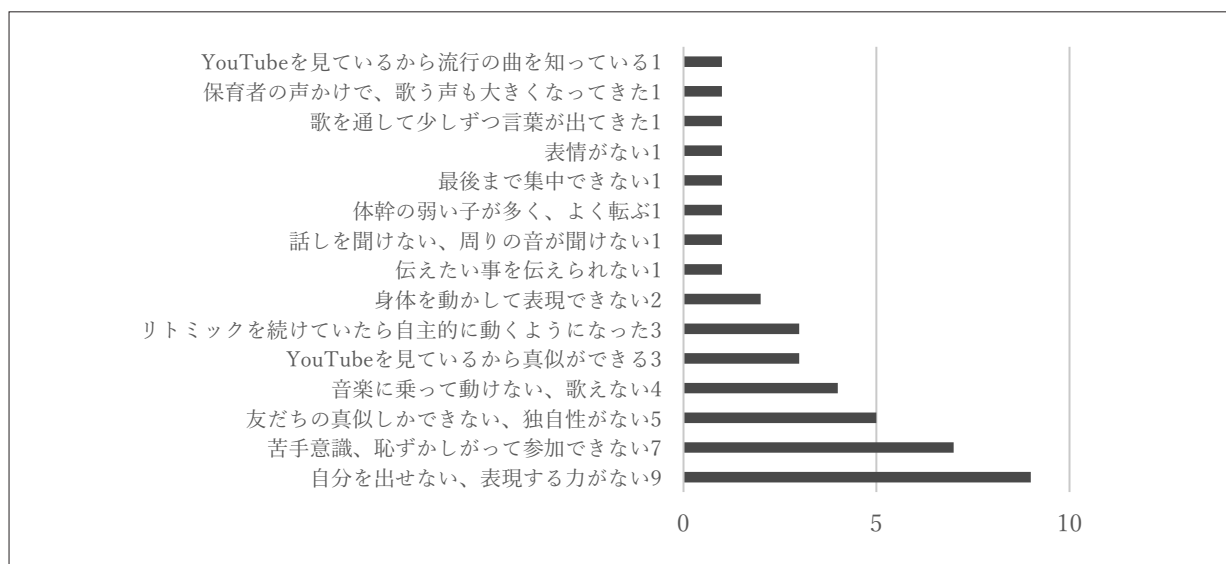


まず、「(1) 日常で行っている表現活動について」は、音楽遊びに関して内容は同じだったとしても、「リトミック」「リズム遊び」「手遊び・歌遊び」「楽器」といったように、個々人により呼び名が分かれた記述のまま結果を出した。絵本・読み聞かせが全体の7割強ではあったが、「音楽」を一括りに考えると、日常に行う表現活動の9割が、何らかの「音楽」であるという結果であった。これらからは、本

を開けばすぐに様々な世界へ誘える「絵本」や、大抵の保育・教育現場にあり、蓋を開ければすぐに様々な世界へ誘えるピアノで、用意するものが何もなくとも行える「リトミック」等、身近にあり、準備に手のかからないものが好まれている、とも読み取ることができる。

(2) 最近の子どもたちの表現方法での変化や、気になっていることについて

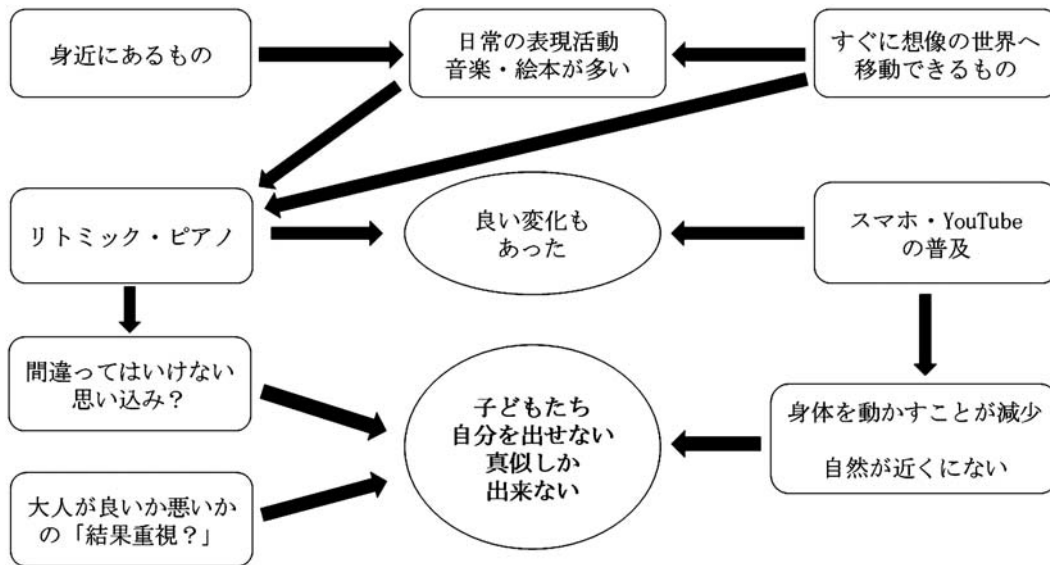
表3 「最近の子どもたちの表現方法の変化や、気になっていることについて」



次に「(2) 最近の子どもたちの表現方法の変化や、気になっていることについて」は、「自分を出せない、表現できない」というようなことが多かった。その理由としては、「自己肯定感が低く自信がない」「間違っはいけないと思い、表現ができない、友だちの真似しかできない」「自然などが身近にないため、自然の表現が難しい」「スマホの発展により、指先や身体の動きなどが鈍くなっている、身体を動かして表現することが減ってきた」という分析をされていた。これらからは、「良いか悪いか」だけで判断される、間違えてはいけない、という結果重視で、表現のプロセスが軽視される環境の中に子どもたちを押し込めてしまっているのではないかと、という懸念もなされる。子どもは、大人という人的環境の中で成長していく、ということから、保育者や大人たちの中に、「良いか悪いかの結果重視」で「プロセス軽視」の風潮があると言えるのではないだろうか。

一方、「発語しなかった子どもが、歌を通して少しずつ言葉が出来てきた」「YouTube等の進化により、真似ることが上手になっている、最近の流行をよく知っている」「リトミックを続けていたら、ピアノの音や声かけで、自主的に静かになったり動いたりできるようになった」というように、音楽や現代の文明をうまく取り入れることで、子どもたちの自主性や発達の援助となっているケースも見られた。以上のことから見えてきたことを、次の表にまとめた。

表 4 アンケートから見てきたこと



これらのことから、「子どもたちが、感じたことや考えたことを自分なりに表現することを通して、豊かな感性や表現する力を養い、創造性を豊かにする」という観点で考えられた「日常の生活の中で行うことができる、感覚間協応に基づく表現活動プログラム」の条件を、以下のように定めた。

表 5 表現活動プログラムの条件

①日常の生活の中で身近にあり、すぐに準備できるもの
②すぐに想像の世界へ移動できるもの
③子どもの表現を全て受容・肯定し、プロセスを重視する
④子どもが主体的に関わり、意欲的に表現できる工夫をする
⑤身体を動かす工夫をする
⑥感覚間協応に基づく

次に、日々の生活の中での表現活動として身近にあり、アンケート調査で多く行われていた「絵本・読み聞かせ」「リトミック」について考察し、表現活動プログラムの開発に繋げていく。

5. ダルクローズのリトミック

(1) リトミックとは

リトミック (rythmique 仏/eurythmics 英) (語源は、ギリシャ語のユーリズムー (良い流れ) に由来している) とは、スイスの作曲家であり音楽教育家でもある Emil Jaques=Dalcroze (エミール・ジャック・ダルクローズ 1865~1950) が創案した教育方法である。「音楽と心と身体」の動きの調和により、注意力と思考力を高め、想像力や表現力を引き出すことで、人間的成長を促そうとするものである。

特に重要なことは、リトミックは、決められたものや完成したものに向かうのではなく、音楽の中で自らが感じ考えて動き、自らが音楽となり、人間の本質的な行動様式に則した体験を、音楽教育のレベ

ルで行うものである。神原（2013：16）によると、ダルクローズは、音楽は音楽だけで完結するものではなく、運動的、言語的に結びつけられることが重要であると考え、「音楽・動き・言語」が融合されたギリシャの総合的な芸術表現形式「三位一体」を、理想の表現スタイルとしていた。それは、目の前にいる人との関係の中で、その場で感じたことを表現する「即興」を基本とした音楽教育方法ということである。

ダルクローズは、「①身体の動きを通して学ぶリトミック（リズム運動・動き）」「②ソルフェージュ（音楽基礎の総称。歌うことや演奏することによる聴覚の訓練等）」「③ピアノでのその場に応じた即興演奏（ダルクローズのリトミックではピアノを示す）」の三本柱を構成要素として、循環し高めていくことを求めている。そして、ピアノが子どもたちを音楽の領域へと運ぶことが出来ると考え、リトミックの即興演奏を「ピアノ」と指定している（フランク・マルタン他 1977：372）。これは、子どもは脳の聴覚情報の処理が未発達で、音の選別がうまくできないため、「多種多様な音が一体となった合奏が苦手」「聴き慣れた人の声・アコースティックな楽器の音が心地よい」とされている、という研究結果とも合致する（小西ら 2017：98-108）

リトミックは元々、ジュネーブ音楽院の学生たちの教育のために創案されたものであった。ダルクローズは、音楽の感動は、全身の筋肉と神経によって具体化できる、と考え、この筋肉運動感覚を「第六番目の感覚」と呼んだ。そして、その様々な動きの経験は、筋肉運動感覚として身体に蓄えられ、必要に応じて呼び戻すことができ、音楽教育を超えた人間形成にまでも繋がるという信念を持っていた（エリザベス・パンドゥレスパー 2012：119）。そしてダルクローズは、リトミックの訓練には、年齢の高い生徒たちよりも、感覚的成長の著しい幼児の方が極めて迅速に発達する、という分析的理解も明らかにしていた。

日本へは1900年初頭から、まずは歌舞伎や舞踏界に影響を与え、幼児教育としては1925年に成城小学校に迎えられた小林宗作（1893-1963）によって導入され、天野蝶（1891-1979）、板野平（1928-2009）と続き、3人の教育観である3つの流れをもって現在に至っている。板野（2003）は、リトミック教育について課せられているものは「リトミックをいかにわが国、各地の条件にあった教育にするかという問題である。そして日本に古くから伝わる遊び歌などの生活の中に融合したリトミック教育の必要性である。そのためには、教師自身の広範な連携が必要となるであろう。」と指摘していた。

（2）幼児のリトミック

音楽表現の授業にリトミックを導入した菅沼（2009：57）は、学生たちの変容から、他者とのコミュニケーション能力、他者を理解する能力、自分の居場所を知る力など、保育者となる学生の表現力を育てることに注目し、今の時代に必要な能力を培う教育法であると主張する。しかし、長島（2014：199-210）は、リトミック指導をそのまま保育者養成校に取り入れることに警鐘を鳴らす。そして、保育者が行う「保育指針に示される音楽的活動」と、音楽家が音楽教育として行う「リトミック」におけるねらいの多くの共通点を見いだしながらも、「自己表現およびコミュニケーションの手段としての生活に密着した音楽活動」と「結果の求められる音楽活動」として、ねらいの違いを明示した。一方、岡本ら（2020：105）も、リズム運動やソルフェージュのようなものさえしていれば「リトミック」と考えられ

てしまう傾向に警鐘を鳴らす研究者も少なくない、と述べている。

筆者（大浦 2019）は、リトミックを実践してきた中から、子どもたちが主体的に関わり、意欲的に表現していたリトミック内容を「幼児のリトミック」¹⁾として構成した。そこには、音楽と身体表現を融合させる観点から、筆者が幼少の頃から親しんできたバレエの手法を取り入れている。バレエは、想像の中で物語の世界に入り込み、音楽の中で身体表現をする。登場人物になりきって、その人物の人生を生き、その人物の気持ちを想像し、感情を動かし、それが観客に適切に伝わるような表現方法を模索する。それは、子どもの特性でもある、見えないものを想像し、聞こえないものを感じ、感情を動かし、別人格の視点で自分や世界を眺める、という感性を養うプロセスとも言える。一方、身体表現は入らないが、バレエと同じく物語性のあるピアノ演奏も、演奏する曲の想像の物語の中に入り込み、見えないものを想像し、聞こえないものを感じるといった感性を養っている。ピアノ演奏もバレエと同じく、そういった感性や表現方法を養うプロセスであり、「幼児のリトミック」を支える重要な要素となっている。

「幼児のリトミック」を、「自己表現およびコミュニケーションの手段としての生活に密着した音楽活動」に取り入れ、「音楽、言語、身体、造形」表現全ての視点から「感性を育む音楽表現プログラム」を構築し、保育者養成校の音楽表現授業で実践してきた。決められたものや完成したものがなく、自分の内にある感情をリトミックによって引き出し、それらを言葉や身体で自由に表現していく「感性を育む音楽表現プログラム」を体験した学生たちは、「人の気持ちを読み取る力（想像する力）」を中心として、保育者になるために必要と考えられる様々な力が相互的に育まれることが示唆された。更には、それらの力が育まれるためには、「自分の表現が肯定され、受容される環境」が必要であることも明らかになった。

また、子どもが主体的に関わって意欲的に表現するには、「楽しい」ものであることが必要であろう。幼児期の生活の中心は遊びであり、子どもたちは遊びの中で学び成長する。遊びの本質は、遊び自体が楽しくて、主体的に能動的に取り組むことである。白石（2013：38）は、魅力的な遊びの条件として「達成・成功への期待及び適度な拘束性からくる緊張感」「逸脱・失敗・自由を許容する開放感」「遊び仲間同士の共鳴・対立による発展性」の三つを挙げている。また、ロジェ・カイヨワ（1990：30-81）は、遊びを、「1. 自由な活動」「2. 隔離された活動」「3. 未確定の活動」「4. 非生産的な活動」「5. 規則のある活動」「6. 虚構の活動」の6つに定義している。また、遊びの領域を、「1. 競争」「2. 偶然」「3. 模倣」「4. 眩暈」と、4つに分類している。そして、これらの遊びの定義や条件は、「幼児のリトミック」の条件と合致している。「幼児のリトミック」は、言葉が未熟な子どもでも、早期から発達している感覚器官に、音楽を通して直接訴えることができ、このような遊びを通して、人間性豊かな教育を自然な形で展開していくように構成されている。

6. 絵本の読み聞かせ

絵本の読み聞かせや歌いかけについて研究をする宮下は（2018：199-230）、絵本や物語が持つ力として、養育者と子どもが同じ時間を共有し、幸せな思い出を共有することに深い意味がある、と指摘する。

自分の体を動かして、行って帰るといった動作が多い子どもの受け入れやすい物語として「行きて帰りし物語」と、生物の帰巢本能との関係を指摘し、信頼できる大人に読み聞かせをしてもらった思い出が、幸せの原点として、安心する帰る場所として心に残る、との考えを示している。

また、絵本の絵について、視覚的にものを捉えるということが、ものを見る時の基本的な尺度になる、という考えから、審美眼を身に付けるにも、ものを見て認識する経験が必要だと説明している。そして、読み聞かせ等の豊かな語りは、子どものところに安心感と安定感を与え、信頼関係を育むことになる、と指摘する。

そして、絵本のお話には、自分とは違う登場人物がたくさん出てきて、見たこともないところへ冒険に行き、感じたことのない感情を体験することができ、それが何と言う感情なのかを言葉で知り、周りとその感情を共有するコミュニケーションにも繋がる。読み聞かせをしてもらっている時の子どもの脳の活動を調べた結果、感情・情動に関わる脳の領域が活動していたことが明らかになっている²⁾。子どもたちは例え、言葉の意味がわからなくても、読み手の言葉に表れる感情を受け取り、喜怒哀楽の感情や情動が内側から湧きあがり、動かされることで、感情体験をしていることになる。

一方、文字や絵や、読み手の声や表情から、隠されている情景や感情を感じ取ったり、目に見えないものを想像したり、お話の中の登場人物に憧れながらも、個々人では受け取り方が違ってくる。読み聞かせだけで終わると、そのまま個々人の受け取り方のまま内面に残っていく。しかし、そこから展開する活動に入ると、自分のイメージした世界を話したり、表現したりすることでイメージが膨らんだり、更には、他者とイメージを共有し合うことで、想像力や物事を見る力、思考力や受容する力、コミュニケーション力に繋がると考えられる。

7. 考察と今後の課題

本稿では、「子どもたちが、感じたことや考えたことを自分なりに表現することを通して、豊かな感性や表現する力を養い、創造性を豊かにする」という観点で考えられた、「日常の生活の中で行うことができる、感覚間協応に基づく表現活動プログラム」の開発に繋げることを目的としてきた。

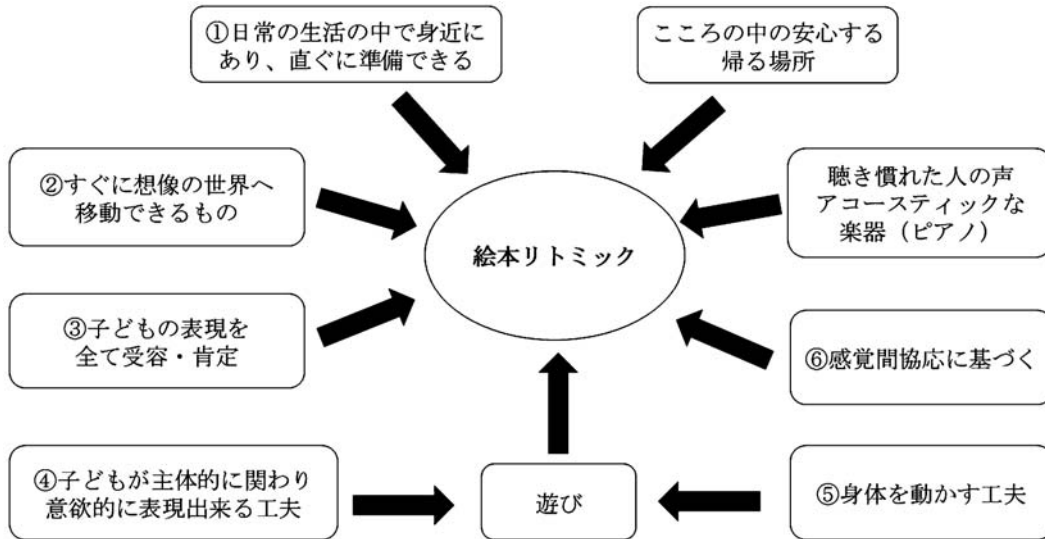
これまでの検証から、読み手の言葉に表れる感情を受け取り、喜怒哀楽の感情や情動が内側から湧きあがり動かされる「絵本」と、見えないものを想像し、聞こえないものを感じ、子どもが主体的に関わって意欲的に表現すると考えられる「幼児のリトミック」を融合させた「絵本リトミック」³⁾が、表現活動プログラムの条件（表5参照）に合致することが示唆された。

「絵本リトミック」とは、物語性を持つ「絵本」と「音楽」を融合させ、そこに、他者の立場に立ち、他者の視点から感情体験し、先生の真似をしなくてはいけないのでもなく、友だちと違ってはいけないのでもなく、自分の自由な表現を受容される「幼児のリトミック」を加えたものである。読み聞かせや歌いかけの展開活動にもなる、絵本と音楽を融合する方法は、現在、音楽教育や幼児教育の中では頻繁に「絵本リトミック」「絵本ライブ」等、様々な呼び方でなされている。また、絵本と楽譜が一緒になっている子どものためのピアノ教本も多数ある。そして、ピアノも絵本も大抵の保育・教育現場にあるものであり、気軽に日常に取り入れることができる。何より、目の前の子どもたちに合わせて展開してい

くことができ、ピアノの苦手な人のための即興演奏法も考えられている。

よって、「絵本リトミック」を1つの表現プログラム方法として提案する（表6参照）。

表6 「絵本リトミック」の提案



岡本ら（2020：32-258）は、保育者自身の感性や表現する力が豊かであるためには、保育者自身が多様な経験をし、本物の文化と出逢い、心動かされる様々な経験をし、多様な表現方法を身に付けることが大切だと説く。そして、人間の特徴である「外からの情報に対して必ず価値的判断をし、そのあとに思考を始める」ことと、人工知能の「情報を感じてもその情報を価値判断しない」特徴を比べ、だからこそ、人工知能が行えない初発の価値判断を豊かに行える、感性が豊かで、表現が個性的な人が必要となる時代だと指摘している。

今後は、既に実践しているものに加え、保育者と子どもたちのどちらにも「絵本リトミック」の実践と調査を行い、保育・教育現場や子育て支援の場、音楽療法の場等、広く貢献していくことが課題であるとする。

<注>

- 1) 筆者は25年の音楽現場経験から、子どもたちが主体的に関わり意欲的に表現していた、ピアノを通して行ってきたリトミック内容を、「幼児のリトミック」としてまとめた。
大浦知加（2019）「保育者養成校における『音楽表現』の授業実践—『感覚間協応』に基づく授業モデルの開発と展開—」『大阪教育大学初等教育講座 実践学校教育研究』第21号参照。
- 2) 脳機能イメージング研究と呼ばれる研究分野であり、機能的MRIや光トポグラフィーといった装置を使って、何かを行っている時の人の脳活動を可視化する（宮下2018：234）。
- 3) こども園や保育者養成校、教員免許更新講習やこども園研修、音楽イベント等で実施。

大浦知加 (2021) 「『音楽・言語・造形・身体』表現による『創作音楽劇』授業の開発と実践—『MI理論』に基づきそれぞれの強みを活かして—」『大阪教育大学初等教育部門 実践学校教育研究』第23号参照。

<引用・参考文献>

- フランク・マルタン、チボル・デヌス、アルフレット・ベルヒトルド、アンリ・ガニユバン、ベルナール・レイシエール、クレル＝リュズ・デュトワ＝カルリエ、エドモン・スタドレ (1977) 『エミール・ジャック＝ダルクローズ』板野平訳、全音楽譜出版社
- エリザベス・パンドゥレスパー (2012) 『ダルクローズのリトミック』石丸由里訳、ドレミ楽譜出版社
- エミール・ジャック・ダルクローズ (2003) 『リズムと音楽と教育』板野平監修、山本昌男訳、全音楽譜出版社
- 神原雅之監修、小田島誓子執 (2013) 『1～5歳のかんたんリトミック』株式会社ナツメ社
- 小西行郎、小西薫、志村洋子 (2017) 『赤ちゃん学で理解する乳児の発達と保育2』中央法規
- 長島礼、五味克久 (2014) 「保育におけるリトミックの意義に関する一考察：幼稚園教育要領・保育所保育指針における音楽とリトミックの比較分析」『神戸大学大学院人間発達環境学研研究科紀要』第8号 (1)
- 大浦知加 (2019) 「保育者養成校における『音楽表現』の授業実践—『感覚間協応』に基づく授業モデルの開発と展開—」『大阪教育大学初等教育講座 実践学校教育研究』第21号
- 大浦知加 (2021) 「『音楽・言語・造形・身体』表現による『創作音楽劇』授業の開発と実践—『MI理論』に基づきそれぞれの強みを活かして—」『大阪教育大学初等教育部門 実践学校教育研究』第23号
- 岡本拓子、花原幹夫、汐見稔幸 (2020) 『保育内容「表現」』ミネルヴァ書房
- ロジェ・カイヨワ (1990) 『遊びと人間』多田道太郎、塚崎幹夫訳、講談社学術文庫
- 白石崇人『保育者の専門性とは何か』社会評論社、2013年
- 菅沼邦子 (2009) 「保育者養成における保育内容『表現』の授業に関する一研究」『広島女学院大学論集』第59集
- 高橋慧 (2015) 「乳幼児期からの複数領域を結びつける表現活動の可能性と感覚間協応に基づく理論的説明」『美術教育学会誌』第36号
- 田島信元、佐々木上部、宮下孝広、秋田喜代美 (2018) 『歌と絵本が育む子どもの豊かな心』ミネルヴァ書房